

ともの家 だより

＜いかに障害が重くとも尊厳ある生活を保障する＞

家族の声「繋がりの方に包まれて…」

アンジュールともの家 Aさん ご家族

20 年近く前から、私と妹は両親の元に通い続けてきました。初めは徐々に覚束なくなってきた両親の家に、手伝いに通いました。次には、父が溝辺ともの家に、デイサービス利用の後入居させて頂きました。そこへ母と共に父を訪ねました。その後、母もともの家の父の部屋に合流させて頂き、入居。その半年後には新築されたアンジュールともの家に移りました。父母は廊下を挟んで各自の部屋を頂き、そこで、父は 6 年半、母はさらに 6 年半を過ごし、13 年の月日が流れました。

両親の晩年は、ともの家の歴史と共に、その恩恵にあずかりつつ支えて頂いたありがたい御縁の上にあります。その長きに渡り両親の介護・看護に、職員の皆様は大変温かく心をこめて対応してくださいました。そのことを、私たちはとてもありがたく嬉しく思うと同時に、うれしければ嬉しいほど、つつい職員の皆様の熱意にすがって、色々なリクエストをさせて頂きました。それは我ながら心苦しくなるほどでしたが、それにも拘らず職員の皆様は精一杯受け止め、応えてくださったこと、感謝の気持ちいっぱいです。そして、実は両親だけでなく、両親の元に通っていた私たち家族も支えられていたのだなあ…と思います。

父も母も、年々、要介護 5 に向かって進んで、少しずつできることが限られていきましたが、その道中ずっと入居者の方々や職員さんと、人の仲に温かく包まれていた日常があったことは、孤立せずに色々な刺激をもらえて幸せな年月であったと振り返っ

ています。また、ともの家に行くたびに職員さんの個性に触れるのは楽しみでした。入居者への接し方やお心遣いにもその人流があつて、心和みました。

母が亡くなってしばらくは、行き所が無くなって心さまよい、何だかポカンと心に穴が開きました。そして20年前に遡った頃の両親の位置に自分が立っている景色が映ってきます。これから、私も同じような道をたどって行くのですが、ともの家に包まれた繋がり力を胸に、ゆっくり、少しずつ自分なりの繋がりを作り楽しみながら、歩いてゆけたらと思っています。あ・り・が・と・う・ございました！



大名門準一さんの思い出

吾も紅 渡邊 朋

誰にでも優しい人だった。孫の歳ほどの自分たちに対しても、決して怒らず寛容であり続ける人だった。

「迷惑をかけてすまんのぉ」が口癖で、できる限り自分の事は自分でやろうとし続けた人だった。妻・督能さんに優しく接する旦那さんで、督能さんだけでなく誰に対しても優しい稀有な人だった。僕が仕事を始めたばかりの頃にはもう既にともの家と繋がりがあり、自転車の前カゴに古新聞を乗せてわざわざ持ってきてくれていたのを覚えている。

元気よく自転車に乗っていた準一さんが、危なくなつて自転車をやめ、利用者として奥さんのもとに通うようになり、ある日家で転倒してから、歩くのにも限界を覚え……準一さんが泊まり利用になってからはよく戦争の話聞かせてもらった。本人は語りたくなかったかもしれないが、実際に戦争を経験した人の話は貴重だ。僕自身戦争の話聞くのが好きだ。決して軍国主義なわけではないが、平和主義者として聞きたいのだ。そこには漫画や映画の中には描かれないリアルがある。それでも終戦後から引き上げてくる時までの事は一切話してくれなかった。よほど辛い思い出しかないのだろう。

海外へ挑戦の場を求めた日本の若武者を応援するのが好きで、錦織圭や大谷翔平、マエケンやマー君など、スポーツの種類を問わず、よくテレビで応援していらした。そういう海外のスポーツ番組は夜中に放送される事が多く、夜勤をしながら一緒に応援

したものだ。錦織の不調や大谷翔平の怪我を、自分の身体の事よりも真剣に心配しておられた。

新聞を読み、ニュースを見、メジャーリーグ中継を真剣に見つめ、日々動かなくなつてゆく身体で心だけはアメリカやウィンブルドンに翔んでいたのだろう。今際の際まで親族の事、妻の事を考え、皆に礼を言い、言葉を残し、最期まで恨み辛みや悲観的な事を一切口にせず、静かに逝かれた。 督能さんの手を握りしめたまま、静かに。眠るように。

激しい戦地に赴き生きて戻り、激動の昭和を生き抜き、平成の幕切れを見ず、流転する日本の行く末を案じ、その大きな心で灯台のように周囲を優しく照らしていた人が、その灯りを静かに消した。



職員のことば

一年を振り返って

溝辺ともの家 北川 正



昨年4月にともの家小規模多機能に勤務し、あっという間に1年が経ちました。経験も浅く不器用なため、利用者さんや同僚に迷惑を掛けることが多く申し訳ない思いでいっぱいです。日々悪戦苦闘していた中で今でも忘れられない出来事があります。排泄介助をしているとき、汗をかいている私を見て利用者さんが「汗かいてるね」と言いながらトイレットペーパーで額を拭いてくださり、とても嬉しく思いました。ケアとは一方的にサービスを提供する事ではなくケアを行っている者がケアを受けている方から元気や充足感が得られ、お互いが相互扶助のような関係で影響を与え合っていくものだと思います。

今年の6月からグループホーム「溝辺ともの家」に異動しましたが、今までの失敗や反省を糧として利用者さんとの関わりを大切にしながら頑張っていきます。

ともの家 20 周年記念論文募集とスウェーデン視察研修派遣選考について

理事長 永和 淑子

マンネリと停滞ムードの職員研修を打破(?)すべく提案した海外研修であったが、職員の反応は今一であった。課題はノーマライゼーションやユマニチュードについて具体例をあげて論じること、また自由題も可とし、その応募論文の中から優秀作を選び海外研修に参加させるというものだったが応募数は4点であった。

選考委員の水野喜代志さんは「よく4人も書いてくれましたね」といわれるが、提案者としては、ノーマライゼーションやユマニチュードの理論の勉強もできそのうえ海外研修にいける一石二鳥の好機なのに、と意外な応募数であった。

9月のスウェーデン研修日程はすでに決まっておりに研修に派遣する人物を特定しなければならなかったため、水野・中林両委員に原稿を送り各人が採点しその結果を持ち寄った。その結果、最優秀に永和里佳子さん、次点に渡邊研太郎さん、佳作は吉岡貴志、渡邊朋さんとなった。

水野・中林両委員は、日々現場で働きながら論文に取り組むのは並大抵のことではない、提出したというだけですごいことだと感心しておられたが、私も同感である。できることならば応募者全員をスウェーデンで学ばせたいと思ったが、現場のほう調整できないだろうということで断念した。論文に取り組んだ各人の今後の一層の活躍を楽しみにしている。

以下は選考について水野委員の講評である。

ともの家 20 周年記念論文の選考について

なかま共同作業所 水野喜代志

ともの家 20 周年の記念論文は4本提出されました。自分の考えをまとめる知的作業は、現場で働きながらの身では大変骨の折れることだと思います。論文をまとめようとした心意気こそ大いに誉められるものだと思います。この4つの論文は公平を期すた

め著者名は伏せられ、論文A、論文B等となっていました。これらの論文を読みながら、多くのことを考えさせられました。こちらの方がお礼を申し上げたいほどです。

ところでレポートの評価をどう判断するかは、大変難しいものがあります。単語の正誤をつけるのは正解の一覧表で比較すれば簡単に点数が出ます。しかしレポートの評価はそうはいかない。選ぶとなると順位もつけねばなりません。評価をする側の価値観、考え方、さらに生き方なども、「評価の出し方」の背景にあるように思います。評価する側の「評価」が問われることにもなりかねませんので、緊張の中で読み終えたことを最初に述べておきたいと思います。

それで論文を評価するために自分なりのいくつかの評価基準を一応設定してみました。①書くための動機、「問題意識」があるかどうか ②ケースなど具体的なものを取り上げているかどうか ③読んで内容が理解できるために、わかりやすく豊かな表現力で記述されているかどうか ④20周年にふさわしい実践力や展望が語られているかどうかなど。この4点は、いずれも介護の現場で働いている従事者の資質のような気もしています。

以下4本の論文の評価について、簡単に述べさせていただきたいと思います。

A論文について。介護職員としての13年の経験が、筆者自身の成長につながっているようで素直に文章が読めました。施設が取り組んでいる事柄への姿勢も正面から向き合っているように思えましたし、生産の視点を導入した畑づくりやバザーの販売などは、介護に目を奪われがちな日常に新しい視点を取り入れた興味深い実践だと思えました。グループホームの伝統的な文化を継承しつつ、時代の変化に応じた課題を実践化していることに共感を覚えました。創設者の永和理事長の言及について、その思想を忘れない意志を感じさせるものでした。20周年にふさわしい論文だと思いました。

B論文について。「パーソンセンタードケア」「ユマニチュード」の概念に学びつつ、自分の遭遇したケースからケアの課題や原因を振り返っていました。総じて介護の場面での、トイレ介助や声かけなどの小さな所作にも細かな配慮ができるようになり、コミュニケーションの確かさを感じるといっています。それが仕事のモチベーション力となっているとの指摘は、認知症高齢者とかかわる介護の仕事を続けるには、どうしても自分の成長を見つめる観点が必要であるといってもいいでしょう。モチベーションの内的な正体をさらに深めていっていただきたいと思っています。

C論文について。20年前の介護施設の実態はこのレポートの著者の指摘の通りで

した。その状況の中でも良心的な人々が一つ一つ改良していった歴史があります。さて、その後の介護の実態はどうでしょうか。手抜きも怖いですが、頻繁に起こっている介護現場の虐待は、深刻な問題が横たわっていると思います。利用者の人間の尊厳が傷つくことは、介護する側の人間も、人間の尊厳を喪失することになります。「その人の側で話を聴き、観察し、かかわっていること」そのケースなどの紹介が欲しいところでした。多分多くのケースを見てこられてきたと思います。大切な人間の尊厳の意義は、やややもすれば「大切だよ」で一面的な表現で終わりがちですが、臨床の場での証明は貴重です。わかりやすく文章で書かかれる力を持っておられるので、次回心に迫るレポートを期待したいと思います。

D論文について。自分自身に問いかけて、わからないことを一步一步自分でわかるように努力されていることは大変好感がもてます。会話の記述も具体的でした。ユーモアのセンスもなかなかのものです。さまざまな人々の引用も、著者が常に幅広い事柄に関心を持っておられるから生まれたものなのでしょう。「介護」を多面的にとらえることは、臨機応変である介護問題への解決にとってもヒントを与えてくれるかもしれません。ただ全体を俯瞰してみますと、章立てとといいますか、箇条書きでもいいのですが、何点か項目を立ててまとまっておれば、率直にいつてもっと読みやすく整理された文章になるのではないかと思います。今、どんな「哲学」が求められているのでしょうか。その宿題は、介護の現場からこそ提起されるものだと思います。

論文を読みながら思ったことですが、私の勤務している施設で論文の募集をかけるとしたら、果たしてどれだけの職員が応募するだろうか、と。アンジュールともの家の二階では、1年に2回ほど現場の勉強会（事例発表）が開催されています。簡単なイベントのように思うかもしれませんが、この4本の論文の水準は、「継続は力」という証明といえるのではないのでしょうか。もちろん、そこに参加した人やしなかった人もいるでしょうが、施設としての力がドーンとあるということです。20年の歴史のあゆみは、新旧含めてそれぞれの職員に影響を与えているということです。福祉の思想はコピーが出来ない。どんなに偉大な人が存在しても、少しばかりのマネはできますが、最終的には介護者や支援員がそれぞれの福祉の思想を一つ一つの援助の場面で作り上げていくしか道はないのです。

これからもどうぞ現場で、末永く頑張っていていただきたいと心から願っております。

介護ひまなし日記⑭

北欧研修旅行記=その1

永和 里佳子

その旅は、初めから怪しい雲行きに包まれていた。

まず、設立 20 周年記念！と題売って集めた論文だったが実はともこの家の設立から今年が 19 年目であり、来年が 20 周年であったことが発覚。まあ細かいことはいいか…と気を取り直し、来年大々的に行事をするに於て今回はそのままノリで行っちゃえ！と何とか参加者を 10 人かき集め（10 人以上いないと団体旅行割引にならないため）9 月 8 日～15 日の日程（機内一泊）で行程を組んだ。が、9 月 4 日。記録的な暴風雨を伴う台風 21 号が関西を直撃。高潮により関西空港が広範囲で浸水というニュースが入った。また対岸と空港を結ぶ連絡橋には強風に流されたタンカーが衝突し、道路と鉄道が不通…。関西空港から飛ぶはずだった飛行機は空港の復旧が見込めず欠航が決定。「これは…」。皆の脳裏を、7 年前の悪夢がよぎる。7 年前にも故・良之助理事長がリーダーとなり予定していた北欧旅行が、台風のため中止になるという苦い思い出があったのだ。

しかし、新リーダーである理事長・永和淑子は諦めなかった。他に国際線の飛ぶ飛行場を当たった。中部国際空港は満席で見込みなし。それなら九州は…あった！福岡空港からフィンエアが飛んでいる。かくして、我々は 1 日遅れの 9 月 8 日、重たいトランクをえっちらおっちらとかついで、松山観光港から小倉行き夜行フェリーに乗ったのである。私は早くもここで激しく後悔することになった。「せっかくなんだから、新品を買いなさい」という母の助言に対し、貧乏性の私は父の遺品である 25 年前のトランクがある！もったいない！と突っぱねたのだ。港で皆さんの持っているトランクを見てびっくり。ピカピカして軽そうなのである。年に数回は海外旅行をしているという松岡看護師は「これ、6 キロしかないのよ」と手馴れた手つきで颯爽とトランクを転がしていた。対して私は、それ自体の重さがすでに 10 キロ。中身を入れると総量 18 キロになる古色蒼然とした（思いっきり押さえないとふ

たがしまらない)しろものだった。しかも、片側にしか車輪が無いため、「押す」のではなく、斜めに倒して「引っ張」らねばならない。船着場は港の一番端であった。いつ終わるとも知れない通路をゴロゴロと引っ張って歩きながら、手はちぎれそうに痛いし、荷物を捨ててしまおうかと思うことが何度もあった。フェリーの階段はさらに地獄であった。荷物を担いで上り下りし、なんとか乗り切ったときに「大変だったね」とすでに旅が終わったかのような気持ちに一同なったのだった。

(まだ一步も日本を出ないままに次号に続く)

※尚、後援会報「寒梅」次号に参加者の詳しいレポートが載っていますので、併せてご一読ください。



編集後記 今回のともの家だよりは、それぞれ看取りを終えたご家族・職員からの言葉と職員の現場の声、そして研修論文の募集・選考の経緯と多岐に渡る内容となった。特に審査員を務めてくださった水野先生の講評は、単なる審査結果にとどまらず、選者としての見解・思想を含みとても含蓄に富む文章だったと思う。送られたエールを、ともの家の職員各人は真摯に受け止めねばならないと感じた。「最終的には介護者や支援員がそれぞれの福祉の思想を一つ一つの援助の場面で作り上げていくしか道はない」。福祉と言う現場から思想を作り上げていくこと、それが私たちの仕事なのだと心に留めて毎日を送りたい。(里)

社会福祉法人ともの家

〒790-0101 松山市溝辺町甲 94

【Tel】 089-977-8502 【Fax】 089-907-8504

【E-mail】 tomo-home@triton.ocn.ne.jp

【Home Page】 <http://www.tomo-home.jp>